



アンゲラ・メルケル氏(1954-)はドイツキリスト教民主同盟の党首であり、2005年から、現在まで、ドイツ連邦共和国議会の第8代首相を務めています。ドイツ国内で敬愛されているだけではなく、世界のリーダーの一人として活躍されている姿を私たちは報道で知っています。彼女の「政治的決断の根底にあるもの」として、メルケル氏が教会関係の集会でされた講演やインタビューなど16編が収録された『わたしの信仰』(新教出版社)を読むことができました。65歳の国家元首でありながら、爽やかな笑顔が愛らしいメルケル氏に魅了されます。彼女の信仰の確信、哲学的思索の深さ、社会や歴史の現実に対処する姿勢に圧倒されました。心に響いた彼女の言葉を、私の心にも刻みたいと思いました。

「私の人生の模範」の中でメルケル氏は牧師である父上の教会で運営される知的障害者施設で育ったと記しています。その施設の庭師の男性と多くの時間を共に過ごし、自然や植物についてや、知的障害者と話す方法など、実際的な指導を受けました。庭師は自然と結びついている感覚を目覚めさせてくれた人として、彼女の記憶に深く留まっています。成長に伴い、人生の模範となる様々な人物、職業など思い描きましたが、現在は「何度生まれ変わろうと自分自身でありたい」と答えます。「私は何者か？」の問いに、他者と向かい合う際に「何が良いことであり、何が神から求められているのか」という聖書の言葉に導かれていくと話しています。幼少の環境の中で出会った人々から大きな感化を与えられています。

「わたしたちのヨーロッパ人としてのアイデンティティは大部分においてキリスト教的なのです」では神の似姿として人間を理解するキリスト教は、国籍、言語、文化、宗教、肌の色、性別によらない、あらゆる人間の平等を教える。国家のあらゆる活動の中心には、「人間とその不可侵の尊厳があるのです」との基盤に立っています。人間の尊厳を保障することから、自分の人格を自由に発展させることができ、個人の権利が最終的に育つ。自由は最も重要な権利の一つであり、個人の自由意志に基づく共同体の繁栄が求められるのです。この自由の持つ力が完全に発揮されるのは、個々人が持つ、他者との絆においてです。ヨーロッパは複数の文化を持ち、平和に共存するために寛容の魂を持ってきた。これらの精神的、倫理的基盤を固め、刷新するために教会を必要とすると言います。

「人々の連帯と開かれた社会とは矛盾しない」では、メルケル氏の難民救済政策と関連する様々な問題への取り組みについて語っています。ヨーロッパの経済大国として確固たる地位を占めているドイツは積極的に難民を受け入れ、援助してきましたが、保護主義に立つ大国との関連での国内での課題もあります。グローバルゼーションによる経済格差、デジタル化による情報格差、技術革新の速さ、国際テロ、人口変動、世代間格差など、熟慮するとともに、迅速に対処すべき課題です。自身の変化を生み出せるようになりたい、そのための指針としてキリスト教的な人間像という出発点を持つことが大切です。それは「人間の尊厳は不可侵である」という基盤に立つことである。科学技術、文明の進歩についても、オープンにし、共有したい。人間が自分で決定し、自ら秩序を形づくる方向を目指したい。異民族や難民を受け入れる結果、多様性の中で、連帯するために、自立支援をし、自律を要求する統合を目指したいと言われます。メルケル氏のオープンマインドとすべての人間の尊厳を守ることを基盤とする政治手法は、彼女の信仰から生まれたことを知りました。私たちも同世代に生きています。共存、連帯を模索しつつ、努力を続けたいと思わせられました。